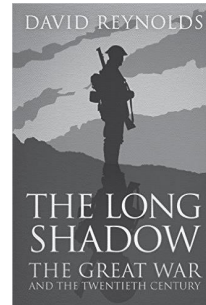


## 書 評

David Reynolds, *The Long Shadow: The Great War and the Twentieth Century* (London: Simon & Schuster, 2013)



Jerry White, *Zeppelin Nights: London in the First World War* (London: Bodley Head, 2014)



小 関 隆

すべてを第一次世界大戦(以下では大戦)に帰するのは乱暴だろうが、ヴィクトリア朝的な社会が終焉に向かう決定的な契機が大戦だったことに異を唱える余地は小さい。国家介入の拡大とヴォランティアズムの後退、連合王国からのアイルランド26州の離脱、帝国＝連邦体制への移行、自由党の凋落と労働党の台頭、金本位制と自由貿易の放棄、これらの変化のいずれにも大戦が深くかかわっている。2014年11月の本学会大会が大戦をシンポジウムのテーマに採用したのも、「ヴィクトリア朝の終焉」の諸相を大戦の中に探ろうとする意図からであったと評者は理解している。

開戦100周年にあたり、イギリスでは大戦の正当性を語る発言が相次いだ。たとえば首相デイヴィッド・キャメロンは、イギリス参戦から100年の記念日に、「イギリス的価値」「今日の私たちが大切にしている自由と主権」を守るための決断であったとして、参戦を明確に擁護した。キャメロン曰く、「無意味」な戦争だったなどと大戦を貶めるべきではない。物

議を醸した教育相(2014年7月の内閣改造で離任)マイクル・ガヴの発言の趣旨も、参戦の正当性を主張することにある。これらの発言が浮き彫りにするのは、今でもイギリスでは大戦＝「不毛で無意味な悲劇」との見方が有力であることに他ならないが、ただし、戦争詩人たちの影響が顕著なこうした認識が浸透するのは1960年代のことであって、終戦の当初から否定的な論調が優勢だったわけでは必ずしもない。大戦がもたらした未曾有の衝撃は、いかなる意味の出来事として大戦を受けとめるか、という問いをその後の時代を生きる者たちに突きつけたのであり、当然ながら、回答は時間の経過とともに変化する。

開戦100周年を期して刊行された研究成果のうちでも最大の収穫の1つと目されるべきDavid Reynolds, *The Long Shadow* は、イギリスにおける大戦認識の変遷を1世紀にわたって通覧する。Reynoldsによれば、第二次世界大戦を経験して以降、イギリスが英雄的役割を演じ、明白な「悪」を全面的に打倒し、しかも大戦の半分ほどの犠牲者しか出さずにすんだこの戦争に比べて、「戦争をなくすための戦争」ではなかったことが明らかになった大戦の影は薄かった。しかし、「よき戦争」の輝かしい記憶は1960年代には擦り切れ、第二次世界大戦がもたらしたのは短命な栄光の末の衰退でしかなかったのではないか、との思いが顕在化して、大戦への関心が開戦50周年の前後に蘇る。結果的に広がったのは、西部戦線の塹壕戦に焦点を合わせた「不毛で無意味な悲劇」という把握であり、学術的にはさまざまな修正主義が展開してきたものの、こうした大戦認識はイギリス国民の多数派に依然として抱かれている。

大戦認識の変遷の詳細な検討も見事なのだが、むしろ本書の本領はイギリスに限定されない視野の広さの方に見出されるべきかもしれない。ナショナリズム、民主主義、資本主義、帝国、文明、芸術、平和運動、コメンテーション、等、多様な論点を駆使し、アイルランドやヨーロッパ諸国、コモンウェルス諸国やアメリカにも的確に目配りしながら、大戦の「長い影」が差す「ポスト大戦の世紀」を縦横無尽に、しかも十分な深さをもって論じる作業は、第一級の歴史家だけに可能なものといえる。戦間期を扱う第1部と第二次世界大戦からポスト冷戦までを扱う第2部の噛み合わせが悪い、終盤に向かうにつれて議論が平板化する、といった批判

はありうるだろうし、戦間期のイギリスの「安定」の称揚には違和感も覚えるが、それでも、近年の大戦研究から 1 冊薦めよと求められるなら、評者は本書を推したい。現代史を考えるうえで必読の書である。

Reynolds がいうように、2 つの世界大戦をコントラストに置く際、第二次世界大戦の重大な特徴とされたのが「空襲パニック」である。ハロルド・マクミランの回顧録によれば、「1938 年の私たちは今日の人々が核戦争について考えるのと同じように空の戦争について考えていた」。空軍力におけるドイツの優位は大陸との間に海が横たわるというイギリスの安全保障上の強みを抹消し、第二次世界大戦の直前には、戦端が開かれれば即座にロンドンも空襲にさらされ膨大な犠牲が出る、との憂慮が広がった。ダンケルクの「奇跡」、バトル・オヴ・ブリテン、ブリッツから成る 1940 年夏＝「<sup>ファイネスト・アワー</sup>最良の時」の「神話」の中で、イギリス空軍パイロット＝「空の騎士」が英雄化された背景には、深刻な空襲の脅威があった（加えて、いかにもイングランド的な田園地帯の上空で、しかもフランス抜きで、「空の騎士」が交戦したことも英雄化を促す要因だった）。

とはいえ、イギリスは 1940 年夏に初めて空襲を経験したわけではない。1914～18 年の戦争の際にもツェッペリン飛行船やゴータ爆撃機による爆撃が実施されたことはよく知られており、Jerry White, *Zeppelin Nights* が指摘する通り、その衝撃はイギリスが侵攻を受けることなどありえないという想定を葬り去るに充分であった。ロンドンへの空襲が始まった 1915 年 5 月 31 日は、ニューヨークにとっての 2001 年 9 月 11 日と通底する性格の日付であるといつてよい。1915 年から 18 年にかけての空襲で、ロンドンでは 668 人が死亡した。対ドイツ休戦が成立した 1918 年 11 月 11 日、ロンドンの街頭に繰り出した人々が踊り明かす光景は馴染み深いものだが、しかし、歓喜のダンスに興じる人々の心には空からの攻撃への深甚な恐怖感が刻み込まれてもいたのである。第二次世界大戦勃発の懸念が深まった 1930 年代後半に精力的に練られた空襲対策にも、被害を完璧に防ぐことなど不可能だ、との諦念を払拭させる力はなかった。

フォード・マドックス・フォードとヴァイオレット・ハントの共著小説（1915 年刊）に由来する題名からの想像に反して、*Zeppelin Nights* の視野は空襲に限定されず、ロンドンに暮らした人々の大戦経験が、反ドイツ暴

動、犯罪、負傷兵で溢れるウォータールー駅、食料・燃料不足、道徳統制、「スペイン風邪」、等、実に多彩な切り口から描かれる。同時代人の日記や回顧録を活用した叙述が湛える精彩には脱帽するしかない。したがって、「大戦経験はその後の 20 世紀を通じて、さらにはそれ以降に至るまで、ロンドンとロンドン住民を変えてしまった」(p.276) と結論的に述べる際、White の念頭にあるのは空襲だけではないわけだが、紙幅の制約ゆえ、以下では空襲の概要のみ紹介しよう。

飛行船によるロンドン爆撃の可能性は参戦当初から語られ、イングランド東部では早くも 1914 年 12 月から爆撃が実施されて、スカーバラその他への 12 月 16 日の爆撃による死者は 100 人を超えた。それでも、自分たちもまた大戦の前線に位置しているのだという認識をロンドン住民に決定的に植えつけたのは、1915 年 5 月 31 日午後 10 時 50 分頃、ブラックアウト施行中のロンドンの上空に到達した飛行船 LZ38 が開始した爆撃であった。1915 年にはさらに四度の空襲があり、爆撃対象もイースト・エンドから中心部へと拡大した。特に被害が大きかったのは、38 人が犠牲になった 10 月 13 日の空襲であった。1916 年 8 月 24 日に再開されるまで空襲は 10 ヶ月ほど中断するが、防空態勢が多少とも整備されたとはいえ、空からの攻撃の恐怖が住民の心から消えることはなかった。8 月 24 日と 9 月 2 日の爆撃がほとんど成果を収めず、9 月 2 日に飛行船が初めてロンドン上空で撃墜された事態を受けて、ドイツ軍は爆撃機の投入を決定し、10 月 1 ～ 2 日を最後に飛行船はしばらく姿を消す。有名なゴータ社製の双発爆撃機による爆撃が本格化するのは 1917 年 6 月 13 日のことで、単独の空襲としては最多の 145 人が死亡したこの日の悲劇は記憶に深く刻まれる。最大の物質的被害が出たのは 7 月 7 日の爆撃であった。昼間爆撃(6 月 13 日も 7 月 7 日も昼間爆撃)に対する警報の発令がようやく決定されるが(誤報による無用な混乱を避けるとの理由でそれまでは行われず)、しかし、夜間爆撃へと方針が切り替わったため、効果は小さかった。9 月 24 日から 10 月 1 日にかけて五度も実施された「満月の空襲」はいかなる前例にも増して衝撃的であり、連夜の空襲がもたらす絶え間ない緊張は住民の神経を限界まで苛んだ。霧深い 10 月 19 日には、再び現れた飛行船による「静かなる空襲」で 33 人が死亡した。その後はまた爆撃機が

とって代わるが、1918年1月28日の空襲では、難を逃れようと人々が殺到した商品倉庫で14人が窒息死するとともに、爆撃による死者は65人に上った。最後の空襲は5月19日、1915年5月31日以来26回目であった。士気が全面崩壊することはなかったとはいえ、3年近くに及ぶ空襲が住民を精神的に追い込んだのは間違いなく、また、警報に関する消極的な態度が示したように、住民への不信・恐怖感を抱えたロンドン行政の弱さも露呈した。

空襲経験が知らしめたのは、戦闘員と非戦闘員の区別が曖昧化され、いわゆる「戦場」から遠く離れた首都に暮らす自分たちも攻撃対象になる、という総力戦の苦い現実であったといえよう。そして、その重みを十全に理解するためには、ロンドン空襲がイギリスの大戦経験のターニング・ポイントである1915年5月に始まったことを確認しておく必要がある。前月25日からのガリポリ上陸作戦が惨憺たる失敗に終わったことへの失望感が色濃い5月7日にはルシタニア号撃沈事件が発生、12日にはベルギーにおけるドイツ軍の「蛮行」に関するブライス報告書が公表され、さらに、14日の『タイムズ』に砲弾不足を放置して西部戦線での苦戦を招いたアスキス政権を激しく批判する記事が掲載されたことをきっかけとして、史上最後の自由党単独政権が25日に崩壊する。後継のアスキス連立政権の最大の課題となるのが、前例のない徴兵制の導入であった。つまり、5月31日の最初のロンドン空襲は、短期で終結するはずだった「文明のための戦争」の泥沼化とそれが不可避的にもたらす多大な犠牲(1915年4月22日にドイツ軍が初めて毒ガスを使用したことも不安を掻き立てた)が認識されるようになってきたタイミングで、漂い始めていた厭戦気分を強烈に刺激する出来事だったことになる。断続的な空襲の恐怖はロンドン住民の大戦経験の通奏低音となり、自らを完全に守ることなどできないというある種の絶望感を伴う大戦認識を促したように思われる。

論述スタイルはまったく違うものの、2冊とも著者の恐るべき博覧強記を伝えるに十分な内容をもつだけでなく、作品としての洗練も備えており、一読に値する。ここ10年間ほど大戦研究に従事してきた者として、大いに学ぶと同時に、これだけの達成を前に自分はどうの一石を投じることができるのか、しばし考え込まざるをえなかった。